

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことばを掲載いたします。

妙なるかな夫婦の縁

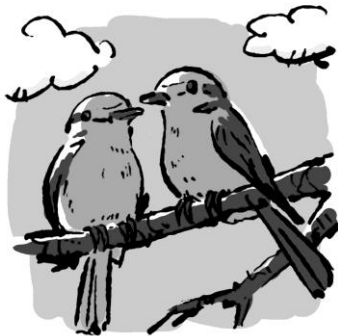
はじめはまったく知らない人であったのに、それがこうして生活を共にして、親よりも誰よりも密接な暮らしの中に、その一生を遂げようとしている。考えてみれば、これほどふしぎなことはあるまい。

「何億という異性の中から、よくもまあ、お前さんといっしょになったものだ」

とは、いつわらぬ各人の感想であろう。不思議といえば不思議、奇妙といえば奇妙、へんてこといえば、これほどへんてことなものはあるまい。であるのに、平素は、それほど不思議とも奇妙とも、へんてことも思っていないのであるから、それだけいよいよ妙なのである。

結婚してはじめて人は一人前になる、というありふれたことばの意味を、ほんとうに考えてみたことがあるだろうか。男一人だけでは、半分もその力が発揮できない。女一人の場合も同様だ。ここに夫婦の縁が結ばれて、それぞれの力が、個性が発揮される。人間生活の原型がなりたつのである。

たとえて言えば男一人だと、らんぼうな力があり余った濁水のようにおし出されて、健全な個性がこわされやすい。女一人だと、何かにつけて不足感が多くなり、やさしい持ち味に傷がつきやすくなる。一方は余つ



夫婦愛を深める

丸山竹秋

てしまつてどうしようもなくとがり、他方は足りない、及ばないで始末におえずへこんでしまう。

このように半分くらい（あるいはそれ以下）の力量しか現わし得ないのである。これが夫婦になると、たとえそれまでまったく縁もゆかりもない者同士であっても、新しい力を得たようにして本然の長所をうちだしはじめるのだ。

縁もゆかりもない、といつてもよく見れば、そこにはいろいろなつながりがある。あるいは仕事を通し、人を通し、その他さまざまな社会的な接点（ふれあい）があつてこそ、結ばれるのであつて、そこに無限ともいえるおもしろさがひそむ。

お互いをよく知り、そして愛する。なぜなら、今までよく知らず、そして愛も自覚しえなかつたがゆえに……という道ゆきも確かにあるのであつて、そこに人生の微妙さがあるのではないか。

結婚の形式にはいろいろあつて、それぞれよいところがあり、表面だけで評価することはできないものなのだ。

補いあつて生まれる夫婦愛

とにかく男と女はそれぞれ欠けたところがたくさんあるのだから、夫婦となり欠陥を相補つてはじめて人間生活の原型がスタートするのである。原型とは「一人前」ということであり、そもその単位ということでもある。

（『あなたは生命の元を見つけたか』より）